

---

# 萌えよ、剣

みづき海斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

萌えよ、剣

### 【コード】

N7632X

### 【作者名】

みづき海斗

### 【あらすじ】

宮里 春樹 と新藤 冬樹 はごく普通の出逢いをした。海斗初のラブコメです。

## 1・マジっすかー？（前書き）

未完のものもありますが、気分を変えて！。

## 1・マジっすかー？

まずは登場人物の紹介から。

宮里 春樹

(5人姉妹の末っ子。男の子が欲しかった父故の命名)

新藤 冬樹

(『自宅』ではなく『オタク』的要素有)

2人の出逢いは冬樹による春樹へのナンパであった。

「はい？」

春樹は目を丸くした。当の冬樹も目を丸くしていた。

何しろくサンシャイン80>で開催されていた某コ〇ケが出逢いの場所で、春樹はとうとうこの時代にブラック・ペガサスのコスプレをしていたからだ。

「はい？」

カメラ撮影は禁止。

春樹は再び冬樹に繰り返した。「今、何て言ったの？」

「僕と付き合って下さい。」

伊達メガネかどうか黒ぶちの眼鏡をかけている冬樹。だが、その視線は『マジ』だった。

「今時、貴方のように純粹に〇〇 矢を愛する人はいません!! 僕も純粹なファンなんです。」

「はあ。」

春樹はぼけっと天然のボケをかまして、「これ兄のお下がりなんですけど、そんなに欲しいんですか？」

「いえ」

冬樹は答えた。「コス〇レより、そのコス〇レをしている貴方に  
一目ぼれをしたんです!」

確かに。

春樹は可愛い。ブラペの格好をしているとはいえ、顔はくABC  
98系顔立ちに似ている。

かというと、冬樹はというと携帯ストラップが似合いそうなただ  
の『ヲタ』的な格好をしている。

当然、釣り合わない。  
が。

「いいですよ、お付き合いしても。」

天使の微笑で春樹は答えた。

「本当ですか!？僕、今まで彼女いなかったんです!これこそ運  
命の出会いですね!」

「はい」

ブラック・ペガサスの衣装で春樹はまた可愛らしく笑い、「じゃ、  
これからご案内しますわ。私、バイトで来てるからトイレの場所く  
らいちゃんと判ります。でも、入口までですよ。」

「はい??」

冬樹は沈黙した。

これが、2人のごく普通の出会いだった。

暫くしてから、冬樹は叫んだ。

「マジっすかー?」

付き合いの意味を全然理解していない、春樹。  
でも、それは仕方が無い。

天然のボケで何人の男性との出会いを逃した事か。  
今年で18歳になる。

その天然ボケさえなければ… …今頃は。

「はい… …。」

冬樹は肩を落とした。「入口まででいいです。少しでも貴方の近くにいたいですから。」

「どういたしまして( ^o^ )」

運命の出逢いというのは、この事だろうか？

マジっすかー??????

冬樹の心の鐘はマジっすかー、と鳴り響いていた。

# 1 マジっすかー？（後書き）

半分、作者の遊びですー。

2・同棲っちゃんじゃ!?(前書き)

そして、それは全ての始まりであった。

## 2・同棲つちゅーんじゃ!?

トイレから黒と白の柄のハンカチで手を拭いて出て来た冬樹。

春樹はにっこり笑って彼を出迎えた。

「お帰りなさいませ、ご主人様？」

「……」

冬樹はのけぞった。そして、

「あの」

「はい。」

「ブラック・ペガサスの格好でメイド語を使わないでくれる？」

「でも」

彼女は可愛らしく(冬樹にとっては「?」)

「これがお仕事ですから。」

「はあ?」

「コスプレが仕事ですから。」

「そんなバイトあるの?」

「ありますよ。」

「何処で見つけるの?」

「『風呂無A』」

「……」

有名なバイト雑誌+サイトだった。

冬樹は黒ぶちの眼鏡に右手をあて、彼らの後ろを通り過ぎるコスプレ軍団を横目で見つめた。

「あるんです。」

春樹は頷き、「でも、今は都内某所でメイド喫茶のメイドのバイトしています。」

「そうなんだ。」

冬樹はちよっとほっとした気がした。

何しろ理想の女性『萌え』が、ブラペ姿で街中をふらふらするな

ど。

「と、言うわけで。」

春樹は深々と頭を下げ、「今は仕事なので失礼します。」

「ちよ、ちよっと!」

彼は彼女を引きとめた。

「僕と付き合って欲しいっていうのはトイレの場所じゃなくて、君に一目ぼれしたから付き合って欲しいんだ。」

「ブラペとですか?」

「そこから抜け出せ!!」

冬樹はがつくり肩を落とした。

確かに、自分はモデル系の顔でもルックスでもない。石を投げれば何処にでも当たるごく普通の大学生。

有名大学の医学部に通っているが、二浪もしている。とても、彼女と釣り合う事もない。

「駄目?」

相手がブラペの格好をしているから(メイドなら絶対に!!言えない)思い切って言った。

「僕と交際して欲しいんだ。君に一目ぼれしたんだ。ブラペじゃない、君自身に。」

「はあ。」

春樹は小首を再び傾げ、思案した挙句(かどうか@彼女は天然ボケ)こう答えた。

「同棲ならいいですよ。」

「はい?」

冬樹は腰を抜かした。「はい?????」

「私、家出してきたお金が1円もありませんの。だから、住む部屋が欲しくて。」

「何ーっ!?!?!?ホーム・レスなのか君は。」

「春樹です。」

「冬樹です。」

「はじめまして。」

「こちらこそ……」

暫しの沈黙。

「だから、夜は何処で何してるの？」

「工事中の道路の車の誘導とかガード・マンとかです。あ、別にウォーター・ビジネスをしてる訳ではありませんよ。私もただの高校生ですから。」

それが、2人の生活が始まる、そして、とんでもない結末を迎える事になる事を冬樹はまだ知らなかった。

2・同棲っちゃんじゃ!?!(後書き)

遊び心で読んで下さい!!

### 3 ・家賃一萬円の女神（前書き）

某、コ〇ケ会場で出会った春樹 と冬樹 は同居することになった  
が…  
…

### 3・家賃一百万の女神

そして。

結果的に急速展開で春樹と冬樹は同棲することになった。

「狭いよ。」

「カプセルホテルで寝る時もありますから。」

「汚いよ。」

「私が綺麗にして差し上げますわ、ご主人様。」

冬樹はのけぞった。

「だから」

東京 幡谷の駅の近くにある冬樹のアパートの入口の前で、彼は頭をかきむしり、

「『ご主人様』はやめて冬樹って呼んでくれない？」

「はい、宮里 春樹です。よろしくお願いします。」

「いえ、こちらこそ……」

また、2人の間に『幽霊が走った』（良く言わない？そういうの。作者注）

「まあ、いいや。」

キーッ

とドアを冬樹が自室のドアを開けると、

「凄いですねー!!」

春樹が声をあげた。「冬樹ご主人様って読書家なんですね。」

「まあ……」

だが、その本は。

『〇ピース』『〇リコ』『へ〇タリア』

『ブラック・〇ヤック』他、春樹には判らないだろうコ〇ケ本。

『ブラック・〇ヤック』、医学生である冬樹にはある意味当たり前  
前のマンガかもしれないが

他は医大生にはほとんど関係ない。

むしろ、コ〇ケか何処かで仕入れた『萌え』系の本が主である。

しかも、その表紙の女の子は何故か春樹に似ていた。

「とりあえず」

春樹はその『萌え』系の笑顔で言った。

「お掃除をしますわ。私バイトで掃除もしてるから」と、  
部屋の片隅に眠っている掃除機を見つけるとひつつかみ、

ういーん

スイッチを入れる。

と。

うい……ん

止まった。

「ごめんね、春樹ちゃん。」

冬樹は掃除機を受け取りながら謝った。

「先月から電気止められてるの。仕送りとバイトの収入が追いつ  
かなくて。」

「そうなんですか。」

春樹は小首を傾げ、

「じゃ、とりあえず本をかたしてと。」

パタ パタ

バイト慣れか春樹はあっという間に本を分類し、紐でしばった。その手際の良さに唖然とする冬樹。

「はい。」

春樹は冬樹に振り返り、「これで『私の』寝る所はできましたわ

( ^ - ^ )

「はい?????」

私の寝る所。

春樹は確かにそう言った。

自分を指差す冬樹。

「俺は？」

「あそこにお布団がありますから。」

春樹は視線を強引に押入れへと導いた。

「じゃ、疲れたからもう私は寝ますね。」

押入れから一組の布団を取り出して、さっさと敷くと、

「冬樹さん、冬だから風邪ひかないように寝て下さいね。あそこ」

で……。」

空っぽの押入れを指差し、

ぱたん

春樹は熟睡してしまった。

「……。」

仕方なく冬樹は彼女がまとめた本を押入れに敷き、

「新聞敷くよりはいいかもね。」

熟睡する『女神』の横顔を見つめながら、冬樹は押入れの戸を大人しく閉めた。



「まあ、ちよこつとは。」

「不思議と思わないか？幡谷だぞ。」

「すみません。私3カ月前に北海道から家出てきたんで、バイト先の道路だけは詳しいんですけど。」

「それ、職業病ではないか？」

女神は目を細めた。

「そうですね、ご主人様。」

「……。」

女神は天井を見上げ、

「私は100年、この地に住んでいる。つまり、このアパートが建てられるずっと昔からだ。元はここは『縁結び』の神社があった所だ。」

「じゃ、コスプレはそのドレスではなく『みこさん』の方がいいのでは？」

「誰がコスプレの話をしてる！そこから離れる。」

その言葉から2人の事をずっと追って来ていたらしい。

「そこでだ。」

女神は急に真面目な顔をした。「大抵の者は私を自縛霊かと思つてこの部屋から逃げ出す。そのため、私は100人目のカップルをなかなか作りだせない。」

「そりゃそうですね。」

「嫌にはつきり言うヤツだな、傷つくだろ。」

「申し訳ありません。」

「で、何としてもお前と冬樹は結婚して見事にカップリングになつて欲しいのだ。」

「バ・カップリングですか、難しいですね。」

「……誰が『バ』を付けた。そんなカップルではない。」  
そして。

懐から1本の剣を取り出して、春樹に差し出した。

「これは？」

「カップルを別れさす剣だ。」

「はあ。」

「まー、『絶対ない』と思う凡人ヲタ冬樹だが、もし、お前にライバルが現れて冬樹とカップルになりそうだったら」

「この剣で2人の間を切れ、と。」

「……704文字でお前は見事話をまとめたな。」

「725文字に増えました。」

「そういうわけだ。」

女神はそう言い、畳の一枚をあげ、「私は寢床に戻る。くれぐれも『バ』の付かない見事なカップルになってくれな。」

ぱたん

畳が置かれる音がした。

春樹はそこで窓から忍び込む早朝の日射しに目を覚ました。

3 ・家賃一萬円の女神（後書き）

はい、遊んでます！。

#### 4・ライバル出現（前書き）

天年ボケをかます春樹の元に、ライバルが出現した。

#### 4・ライバル出現

春樹と冬樹は秋葉原にいた。

「ソケットが欲しくて。」

と、春樹の休日を利用しての外出@デートだった。

「ロケットですか？」

「まー、そんなもん。」

同棲して3カ月、冬樹も春樹の「天然ボケ」に慣れて来た。

（あゝ、春樹がこんな天然だとは。）

相変わらず、押入れで寝ている冬樹である。

木曜日の昼時、ぶらぶらとソケットを買った後、

（今度は、半田が欲しいなー。）

そんな事を彼が考えていると、

「ちよつと、休憩してお茶でもしません？」

傍らの春樹が言った。

「あ、ごめん。疲れたよね。」

「大丈夫ですよー。」

そして、2人はあるメイド喫茶に入った。

「いらつしやいませ。ご主人様。」

女の子たちが一斉に彼らを出迎える。

「アロマ・セラピーも始めましたのー。」

「……。」

この手の口調にも慣れて来た冬樹だが、

突然、

「あら、冬樹くん？」

『普通』の声で彼の名を呼ぶ女の子がいた。

「ん？」

ちよつと、部屋の片隅を見ると。

茶髪に大きなリボン、目の大きい『萌え』系とはちよつと違った

女の子がいた。

「はい？」

「私よ、明日香。」

と、自分を指差す明日香……というのは、冬樹が高校時代に付き合っていた『元カノ』だった。

「あー!!」

冬樹は声を上げた。

「覚えててくれた？」

明日香はにっこりと笑い、「ヲタ系は卒業したかな？」

と、傍らの春樹に視線を移す。

それからつかつかと彼らに近づき、

「私、冬樹の『元カノ』、内山明日香っていうの。」

「はい、春樹です。よろしくお願ひします。一応、『今カノ』です。」

珍しく。

春樹が自ら進んで『今カノ』と言った。

「とりあえず、座って。コーヒー持って来るから。」

「500円だろ？」

冬樹がそう言つと、

「この店は800円です。」

春樹が答えた。

「何で知ってるの。」

「同僚みたいなものだから。」

「ま、いいじゃない？『元カノ』に会えたんだから、何かいい事あるかもよ。」

「……。」

春樹の目が、急に険しくなった。「じゃ、私はアイスで冬樹にはホットで。どっちもミルクだけ。アロマ・テラピーはいらないわ。」

「かしこまりました。」

明日香は深々とお辞儀をすると、カウンターの方へ歩いて行った。

明日香がモデルをやっている事は噂にも春樹は聞いていたが……  
- 見事なウオーキングだった。

一瞬、『萌え』系から離れる気持ちの冬樹。

「冬樹。」

春樹は冬樹の両頬を思いっきりひっぱった。

「痛いっ!」

「なう。」

春樹は鋭い視線のまま、「『萌え』から離れたでしょ。」

いつの間にか春樹は自分を『萌え』系と自覚していた。

「あんなおばさんがいいわけ?」

「おばさん!?!」

華麗なウオーキングを見せていた明日香が振りかえった。その表情は誰にでも想像出来る。

「言っただわねー!」

明日香が春樹に詰め寄る。

「言っただわよー!」

春樹も負けない。「私は『今』彼と同棲してるのよ。もう過去の事なんてどうでもいいじゃない。おまけに、冬樹はイケメンよ!」  
と、いう風に。

確かに、冬樹はいつの間にかイケメンの部類に入っていた。

太い黒ぶち眼鏡はコンタクトに変え、六本木の美容室が行きつけとなり、服も全て春樹が選ぶ。

メイドならではの彼氏改造計画だった。

「……確かにね。」

明日香もそれだけは認めた。

自分が付き合っていた時の冬樹は、ぶっちゃけダサかった。

熊本から東京に出て来た冬樹と東京育ちの明日香とは好みが根本的に違っていた。

そして、一番の強みは春樹が北海道@OLAY出身であること。  
○ミケでの本は許しているが、BGMは全てビュジュアル系。○A  
CKTや○方神起までアルバムは全て春樹が買い込んで来る。  
が。

その支出の為に、春樹は結局一文無し系で冬樹のアパートにいる  
わけである。

「その子。」

明日香は春樹に視線を向けたまま、「貴方好みの『萌え』系って  
事ね。」

「ああ。」

冬樹はあまり深く考えず、

(ヒューズは何処で買おう。  
などと思っている。

「でも、貴方達恋人同士には見えないわ。」

明日香は断言した。

「はい？」

「はー？」

春樹と冬樹は同時に声を上げた。

それを見て、明日香は大きな声で笑った。

「どう見ても、兄と妹よ。これだから、子供は……」

パシッ

春樹のビンタが明日香の左頬を直撃した。

「何。」

「私は冬樹の同棲相手です！」

明日香の声に春樹は答えた。「だから、冬樹は誰も恋人にはしま  
せん！」

見事に。

春樹の天然ボケがさく裂した。

同棲をしているのに、恋人同士ではない。  
それは、普通、『同居』という。

春樹はそのことに気付かず、冬樹の手を取ると、

「行きましよう。もう過去の事なんて忘れましょ。私のバイト先  
@メイド喫茶で仕切り直しましょ。」

「あ、ああ……。」

冬樹は彼女に引つ張られながら、肩越しに相変わらず『萌え』系  
とは逆のギャル系の明日香に視線を移し、「また、電話するよ。」  
のポーズを取った。

ライバル出現!!

春樹の天燃ボケは乗り越えられるのだろうか？

#### 4・ライバル出現（後書き）

後一息。

5 ぶった切るわよー！！（前書き）

冬樹と明日香の事で頭がいっぱいの春樹は「おでん」を作ることにした。

## 5 ぶった切るわよー！！

だん だん だん だん

春樹と冬樹の部屋にある畳の一枚が開けられ、恋愛を成就させるという女神が台所に姿を現した。

だん だん だん だん

「をい。」

白いドレス姿からメイド服姿に替えられた女神は、「その大根、何で切っている。」

「包丁ですわ。」

「違うっ！！私がお前に携えた恋人の仲を切り裂く剣だ。」

「まー。そうでしたっけ。」

だん だん だん だん

「……。」

女神は目を細めた。

春樹はというと、冬樹の授業に合わせてメイド喫茶でバイトをし、帰って来たら夕食の用意をするのである。

もう、4カ月目に同棲生活は入ろうとしていた。冬樹の卒業も近く、内定も2社決まっていた。大手製造業の会社だった。

「で。お前は最近、おかしいぞ。」

女神は言った。

「おかしいのは、冬樹の方です。」

春樹はやっつと振り返り、じーっと女神を見つめた。「前は時間通りに携帯に電話を入れてくれたり、今頃は『帰ったよ、春樹！』っ

ていう感じだったのに、妙に外出が多いわ。」

だんっ!!!

3本目の大根を切り終えて春樹は沈黙した。

「ほほー。あの明日香という女性が気になるのか？」

「え？でも、彼女は『元カノ』です。」

「それが、縊りが治ったら、お前はとうする。」

「……私は冬樹の部屋に居候して、冬樹を自分好みの男性に変えて……。」

春樹はそこで俯き、「でも、何か今は遠い存在に思える。」

「それが何だか、お前には判るか？」

女神はごく簡単な質問をした。

「はい、判ります！」

彼女は白いエプロンドレスで自信あり気に、

「女神様の願いが達成するチャンス機会です、1000人目の。」

「だから、違うと言っに！」

女神は怒り、春樹の手から剣を奪い取った。

「私の1000人目のカップリングは春樹と冬樹がゴールインする事だ！」

「はあ。」

溜息交じりに、春樹は、「それはそうですけど、冬樹にその気持ちがあるのかどうか？」

「お前には？春樹。」

「私にもその気持ちがあるのかどうか。」

「では、何故、最近やたらイライラしてる？」

「女の子ですからー。」

「じゃないっ!！」

女神はビシツと言った。「それはジェラシーというものだ！」

「じえらしいー？」

春樹は小首を傾げた。「何ですか、それ。」

「……お前は本当に天燃ボケだな。何度男を逃した。」

「数多くー。」

「自慢出来るかつ!？」

女神は叩き伏せるように、「お前は冬樹に本当に惚れてるんだ。」

「好きって事ですか？」

「そうだ。」

「どうして、そんな事判るんですか？」

「私も4カ月程、お前たちを見てて」

それから台所の上のざつくんざつくんに輪切りされた大根の山を眺め、「それ以外ないだろう。お前はちゃんこ鍋でも作るつもりでこんな大根を切っていたのか？」

「今夜は『おでん』です。『おでん』に大根は付きものですよ。」

「誰が何日かけて、大根3本分の『おでん』を食べる？」

「そう言われてみれば」

春樹はふと夕がたの日射しが差し込むアパートの部屋で天井を見上げ、

「そうだわ！」

「気付いたか、やっと。」

「ええ！」

春樹は元気に答えた。「明日香さんにも今夜の食事に付き合ってもらいましょう。せつかくいっぱい作るんですから」

嬉しげに言う。

「……。」

女神は剣を春樹に返し、「私は急にめまいがひどくなった。お前のがコーデイネートしたこの服に関してもだ。」

それだけ言うと、台所を去り畳を一枚上げた。

「寝る。。。。。」

疲れ切った、女神の声が畳の奥から聞こえた。



5 ぶった切るわよー!! (後書き)

作者の趣味のみで書いてますー。

6・そして、萌えよ、剣！（前書き）

明日香を含めて恐怖の「おでんパーティー」が開かれる。

## 6・そして、萌えよ、剣！

その頃、春樹の祖母　千春と春樹の姉　夏樹は『はやぶさ』の中にいた。

「夏樹よ。」

「はい、おばあさま。」

「春樹が送って来たこの写メの男性は、本当に春樹の夫になってくれるのかね？」

「そうだといいのですが。」

夏樹はちよつと俯き、「最初の頃の写メと今の写メの彼は全然違いますわ。」

「そうなんだよ。いつの間にか、イケメンになっておる。まるで、ヨン様のようじゃ。」

「あら、おばあさま。今では彼よりチャン・グンソクの方が時代に合いますわよ。」

「チャン・軍足か。」

「あら、おばあさま。ついたら、何か別の事を想像しましてね、彼の名前から。」

「それはどうでもいい。」

祖母は溜息を付き、「ちゃんとした男性ならチャンでもヨンでも良い。で、ないとおじいさまが経営する病院の跡取りがいなくなる。」

『はやぶさ』の早さの如く、そう言った。

その頃、冬樹は。

明日香のメイド喫茶にいた。

「今日は奢りよ。」

明日香はにっこりと笑い、彼の前の席についた。「ねえ、冬樹。」  
「んー。」

店に置いてある『萌え』系の本を読みながら、「何か言ったか？」春樹の祖母に言わせると、『ヨン様』『チャン・軍足』の如くこの4か月で変身を遂げた彼を明日香は見つめ、「ねえ、私たちもう一度やりなおさない？」  
「んー。」  
冬樹は『萌え』本に夢中だった。  
そこに。

チャララン　　チャララン

テーブルの上の冬樹の携帯が鳴った。

「もしもし。」

『冬樹。今日ね、おでんなの。』

春樹からの電話だった。『でね、明日香さんも誘おうと思って。ついでに言っとね、おばあちゃんが今夜、アパート（うち）に来るの。』

「そう……判った。」

カシヤ

冬樹は携帯を切り、

「そう言うわけだ、明日香。」

「どういうわけなの？携帯、春樹からでしょ？」

「お前も今夜春樹のおばあさんと『おでんパーティ』に参加する事になった。」

「はあ??？」

明日香は口をあぐりと開けた。

明日香にとつても、春樹にとつても（本人は気付いていないが）、状況的にはライバル。

そのライバルというのも冬樹も感じないらしい。

「行くぞ、明日香。」

「って！」

明日香は慌てて席を立ち、大声で、「すみません、店長。今日はこれで上がります！」

そう叫んで、既に店を後にした冬樹の後を追った。

秋の木枯らしがあちこちのコンビニから『おでん』の香りを運んできた。

「行くぞ、明日香。」

「って！」

明日香は慌てて席を立ち、大声で、「すみません、店長。今日はこれで上がります！」

そう叫んで、既に店を後にした冬樹の後を追った。

秋の木枯らしがあちこちのコンビニから『おでん』の香りを運んできた。

そして、その夜。

バトルかと思える『おでんパー』が冬樹のアパートで開かれていた。

「ほら、春樹。大根ー」

「ほら、こつちも大根よー」

『萌え』キャラと『ギャル』キャラに囲まれた冬樹はある意味、『ご主人様』状態が。

「明日香、春樹。」

「何？」

「なーに？」

冬樹は2人を見つめ、「大根以外のおでんはないのか？」  
「つてかー。」

明日香は土鍋を覗き込み、「ここ、大根しかなんだもん。」

「心をこめて、作りました。」

春樹がにこつ、と笑う。

「はー。」

冬樹は溜息をついた。

「ちよつとー！その『ちくわぶ』は私が貰うわよ！」  
と、明日香。

「いいえ！『ちくわぶ』は1個しかないから私のです。」

言い返す春樹。

いつの間にか、春樹と明日香の『おでん』バトルが始まっていた。

「『元力ノ』だからと言って、大根以外のものばかり食べないで  
下さい、明日香さん！」

「大根だけじゃない、はっきり言つてこのおでん。卵も巾着も入  
っているのか入っていないのか判らないじゃない！全部大根に隠さ  
れているわよ！」

ある意味、電気がついたままの『闇鍋』である。

「あんまり威張らないで下さい。」

春樹は明日香をじつと見つめ、「心をこめて作ったおでんなん  
ですから。しかも、冬樹のために。」

「それじゃ、はっきり言うわ。」

キツ！と明日香は春樹を見つめ、「この料理下手！」

「何ですつて!?!」

白いエプロンドレスの春樹が箸を片手に立ち上がる。

「何よ！本当の事じゃない！」

ひょう柄のツーピースを纏った明日香も負けじと立ち上がる。

「おいおい、2人とも。」

冬樹は仲裁に入った。「そんな大根をコケにしたら大根に怒られ  
るぞ。今は大根だつて値段は馬鹿にならないんだぞ。冬大根とも言

うし。」

「その大根しかこの鍋にはないの！」

明日香は怒鳴った。「あー！！何で来ちゃったのかしら？本当だったら今頃冬樹と三ツ星レストランにでも……！！」

「あら、三ツ星でしたら私の実家も三ツ星ですよ。」

春樹は胸を張って、「北海道の三ツ星病院って言ったら知らない人だれもない、おまけに日本で屈指のGMのある病院ですから。」

「病院？」

冬樹が言った。

「病院？」

明日香が言った。

「病院？」

畳が一枚上がり、メイド姿の女神が言った。

「……」（冬樹）

「……」（明日香）

「あら。」（春樹）

早い話が、一人多い。

沈黙が、彼らの間を走った。

「まさか、春樹の実家があの子三ツ星病院？」

冬樹が目丸くして、言った。

「あら、言いませんでした？」

春樹はぼけっと、「4か月も同棲してるからもつこ存じかと。」

「言っていない、言っていない。」

冬樹は大きく首を振った。

言わなきゃ、そりゃ、判らんだらう。

「ってかー。」

明日香がメイド姿の女神を指差し、「誰。この畳返し。」

「失礼な！私は……」  
と、女神が言った時、

バタン

ついでに、

ドタン

玄関のドアが開けられ、そのままドアは倒れた。

「建てつけが悪いわね。」

春樹の祖母と姉 夏樹がそこにいた。

「何ですか！？一体今夜わっ！！」

冬樹は窓辺に身を引き、「訳判らんメイド女はいるし、知らんば  
様が姉さんと出てくるわ。」

「築何年ですかね。」

ドアを直しながら夏樹が、「こんな所に春樹をおいておく訳には  
いかないわね。」

「夏樹お姉ちゃん！おばあちゃん！」

状況をそのままに、春樹が嬉しげに2人の元に駆け寄った。

「びっくりしたわよー、春樹。」

4女の夏樹は春樹を抱きしめ、「『跡取りを探しに家を出ます。』  
と壁に書いただけで家を出るんですもの。」

「そっだぞ、春樹。」

祖母は春樹の頭をつつき、「おまけにこんなおんぼろアパート。」

「……あの」

冬樹はちよつと恐ろしげに彼女たちに声をかけた。「登場人物は  
これで全員でいいですか？いきなりまた、訳判らん人出てくると収  
集つかなくなるんでー。」

確かに。

冬樹の手には既に負えない。

「らしいわね……。作者のご乱心が無ければ。」

と、言い、「で、このメイド女は誰なの？」

「ふんっ！」

女神は胸を張って、「私は縁結びの女神だ。」

「冗談でしょ？」

冬樹が言つと、

「本当です。」

春樹が彼女の言葉を肯定した。「この方は100組目のバ・カップリングを作るためにこの家に潜んでいたんです。」

「ちゃうー！カップルだ！バ・カップリングではない！」

「じゃ、もしかして」

ふいに、明日香が、「私と冬樹がくつついてもいいって訳よね。」

ニヤリ、と笑みを浮かべる。

「それは困る。」

春樹の祖母が凜とした声で言った。「冬樹とやらには私たちの病院を継いでもらわなければならぬ。」

「そうですね、冬樹。」

春樹はにっこりと笑い、「やっと見つけた、後継者ですもの。」

「確かに、ヨン様系になってるな。」

天使は言った。

「軍足ではないのか？その者。」

祖母が目を細めてそう言つと、

「字が違います。おばあさま。」

夏樹が肩を落とした。

「はー。」

冬樹が溜息を付くと、

「どっちを選ぶの？」

と、明日香。

「私ですよね。」

と、春樹。

詰め寄られた冬樹は、遂にキレて手元にあった『それ』を振りまわした。

「ええい、黙れ！」

初めての、『萌え』キャラのキレ。

まるで、連載が打ち切られた時のようなショック。

バツ……！

と、振りまわしたものは女神から春樹に渡されたあの剣だった。しかも。

女神に向かって、それは振り下ろされた。

キーン……！

一瞬、光が部屋を埋め尽くした。

「何？」

「何だ？」

「何じゃ？」

(以下略)  
すると。

光が収束すると、その中心には、モロ、

『チャン・グンソク』系の黒のスーツ姿の男性がいた。

「……また、別キャラ……。」

冬樹は壁に突っ伏した。

「いや。別キャラではない、冬樹。」

男性は綺麗に通る声で、「私はさっきのメイド姿の女神だよ。」

「グンソク様そっくり……。」

明日香の目がキラキラと輝いた。

「誰ですか？軍足様って。」

春樹は小首を傾げた。そこへ姉が、一言、

「また、字が違う……。確かに、貴方はおばあさんっ子だったから仕方ないかしらね。」

と彼女の頭を撫でながらそう言った。

「でも」

春樹は女神……いや、今は青年に向かって尋ねた。「その剣は冬樹が私以外の人を好きになった時に使えって。それで縁を斬れと」

「私はその昔、普通の人間だったのだよ」

青年はそう語った。「つまりはこの冬樹の先祖にあたる。」

「はい？」

「はあ？」

全員が口をぱっくりこんと開けた。

青年は微笑し、

「しかし、この土地の縁結びの神に恋仲になり、社の怒りを買った女神の姿となり1000の人に斬られなければ、往生出来ないのだったのさ。」

「で」

冬樹は目を凝らして、「それを俺が斬っちゃった訳？ご先祖様を」

「ああ。ずっとお前の守護霊となつて『その時』を待っていたのさ。」

「……。」

「じゃあ、あのカップルっていう話は？」

春樹が女神……青年に尋ねた。

「女心を操った方が斬られやすいだろ？ああいう話をして、剣を預けて。」

「そういうもんなんですか？」

「それがお前は特に天燃ボケだから余計に良かった。」  
それから、冬樹を振り返り、

「お前は春樹と明日香、どちらを選ぶ？別に春樹の実家（医者）の事を抜きにしても。」

「そうしたら」

冬樹は2人を見つめ、それから、

「春樹。俺、一目ぼれしたから、ブラペの春樹に。」

「冬樹！」

喜ぶ春樹と、

「冬樹！」

びっくりする明日香。「冬樹！今の貴方はイケメンなのよ！どうして、こんなコスプレっ子に！」

「だって」

別に、という風に冬樹は、「お前が俺に告白した時にも『理由』なんてなかったろ？」

「……冬樹……」

「好きになる事に『理由』なんていらなんだ。それに春樹は」と、わくわく〇（^^）〇顔の春樹を見つめ、

「『今カノ』は春樹だから、明日香。」

「……」

「ま、そういう事だ、みんな。」

と、青年は畳の1枚をめくり、「俺もこれで満足だ。俺が愛した『みこさん』も喜んでるだろう。」

その畳の下に入って行った。「これでようやく眠れる。」

パタ……ン

沈黙が部屋に訪れた。

が、再び、畳の隙間から手が伸び、

「この剣はもういらぬな。縁結びも何も男女の仲っていうのは

なるようになるのさ。」

ずるずるずる… …

剣と共に青年は畳の下へと消えた。

「冬樹。」

春樹はにっこりと笑った。「これが本当の縁結びの神様ね。」

「らしいね。」

冬樹も笑って答えた。

「で。」

春樹の祖母は一言。「今のは何だったんだ？春樹。」

「私も訳判らない。」

「私も。」

明日香と夏樹は同時に言った。

当たり前である。

「縁結びの神様よ。」

春樹は冬樹の左腕に自分の手をかけ、「私と冬樹を結びつけてくれた人。」

『コ〇プレをしている君を好きになっただんじゃない！』

「はあ。」

明日香は頭を抱え、玄関に向かった。「大根で悪酔いしたから、私は帰るわ。冬樹。もう貴方とは会わないから。」

パタン… …

「春樹。」

祖母はじっと2人を見つめ、「家の事はどうでもいい。お前がそ

の冬樹君と一緒にいたいなら、いればいい。」

「そうよ！三ツ星病院だって、まだおじいちゃん元気だし、好きな事やりなさいよ。5人も娘がいるんだから、どれか一人は跡次に当たる」わよ。」

「そうかもね。」

冬樹は髪をかきあげた。

6・そして、萌えよ、剣！（後書き）

いよいよ次はラストです！。

7・エンディング≡ウエディング(前書き)

冬樹と春樹は遂に… …だが。

## 7・エンディング⇨ウエディング

『ねえ、冬樹。』

『何？春樹。』

『私、貴方に好きって言われた事あったかしら？』

『なかった？』

『なかった。』

『じゃ、今度ははっきり言ってね。』

『そうだね。行こう、みんなが待ってる。』

北海道の最北端にある小さなチャペルで…。

それから、3年経った。

「こっちよ、秋樹しゅうき！」

走り始める事ができたばかりの、春樹と冬樹の子供 秋樹しゅうきと海に

出かけた日。

砂浜で思い切り遊んだ3人は、宿へ帰る事にした。

「楽しかったわね！」

「湘南はいいところだろ？」

秋樹にお互いの片手を預け、宿に入った3人。

「わー、畳の部屋だわ。」

春樹は声をあげた。「おばあちゃんも気を使ってくれてるのね。

それとも冬樹のあのアパートがよっぽどインパクトあったのかしら

「？」

「この宿も『三ツ星』の高級宿だから、こんな季節に部屋とれるはずなのにね。」

冬樹も頷く。

「ハイ」

秋樹も16畳の大広間にはしゃぐ。

「これなら」

「そう、これなら」

2人はそつと、唇をお互いに寄せた。  
と。

その時。

パタ… …ン

畳の一枚が『開けられた』。

「お取り込み中すまんが。」

何処かで聞いた事のある青年の声。

「!… …」

「まさか!?!?!」

エンディングⅡ (ウエディン

グ完

## 7・エンディング≒ウエディング(後書き)

はいー、最初で最後のラブ・コメありがとうございました(――)  
ノペコロ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7632x/>

---

萌えよ、剣

2011年10月29日10時11分発行